

『学会開催報告』

第19回日本がん転移学会学術集会 19th Annual Meeting of the Japanese Association for Metastasis Research

第19回日本がん転移学会 会長
(金沢大学がん研究所)

佐藤 博

平成22年6月16-17日の両日、金沢市の金沢市文化ホールにおいて、第19回日本がん転移学会学術集会を開催させて頂き、315名(うち非会員63名)のご参加頂きました。本学会は、基礎・臨床・企業の研究者ががん転移研究について各々の立場・発想で自由に討論できるという点を特徴としています。参加者についてもこの点が色濃く反映されておりました。皆様方のご支援・ご協力により盛会のうちに幕を閉じることが出来ましたことを改めて感謝申し上げます。

2日間で、国際交流セミナー、シンポジウム「がん幹細胞と転移」「分子標的治療」、ミニシンポジウム「マウスモデル」「がん転移診断」、9のワークショップ、8のポスターセッション、2のランチョンセミナーを企画しました。

特に「若手の活性化・国際化」を意識して企画した国際交流セミナーには、母国とは異なる外国(米・豪国)の厳しい環境下で活躍する若手研究者を中心に招聘し、講演をお願いしました。この点では、日本の同年代の若手研究者にはまだまだ危機感が薄いと感じざるを得ませんが、本セミナーで少しでも意識改革が進むことを期待しております。本セミナーには、国際MRS (Metastasis Research Society) 副会長のE.W. Thompson博士をお招きし、司会とともに、今年(フィラデルフィア)、2012年(メルボルン)開催予定のMRSミーティングについてご紹介頂きました。学会理事会メンバーとThompson博士らMRSメンバーが懇談し、日本がん転移学会としても若手研究者の積極的な参加を呼び掛けるとともに、若手研究者派遣を後押しする仕組みを作り上げていく方向で合意しました。

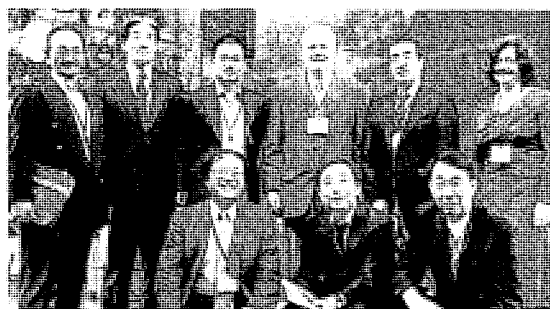
シンポジウム1では昨年に引き続き、転移研究のブレイクスルーとして期待される「がん幹細胞」について、発表・討論しました。いずれの発表も大変すばらしいものでしたが、とりわけがん研究所の仲准教授による白血病幹細胞の抗がん剤抵抗性機構の解析は注目を集めました。また、本学出身の増富博士(国立がん研究センター)によるがん幹細胞とテロメラーズの関連に関する発表もユニークで高い評価でした。シンポジウム全体として、今後益々、転移・悪性化との関連がより具体的に明らかになることを期待させる内容でした。がん研究所の矢野教授にオーガナイズしていただいたシンポジウム2「分子標的治療」では、企業サイドから本領域で最も期待される抗体医薬、キナーゼ阻害薬に関する2つの発表がありました。全体として非常に充実した内容で、本学会をきっかけとしてこの分野での産学協同研究がより発展す

ることが期待されます。ミニシンポジウム1「マウスモデル」では、次々と開発される遺伝子改変マウスの中から本学会において特に注目される3人の講師の先生方にご発表頂きました。がん研究所の大島教授の胃がんモデルマウス、平尾教授の脳腫瘍発生マウスモデルについては非常に注目を集めました。また、京都大学武藤教授は大腸がん転移抑制に関わる新規遺伝子AESについて最新の知見を報告されましたが、今後の展開が期待される内容でした。今野教授(浜松医大)にオーガナイズして頂いたミニシンポジウム「がん転移診断」では、公募演題から6題を厳選し集中的にご討論頂きました。比較的若手の先生方の発表が中心でしたが、その分議論は大いに白熱しました。

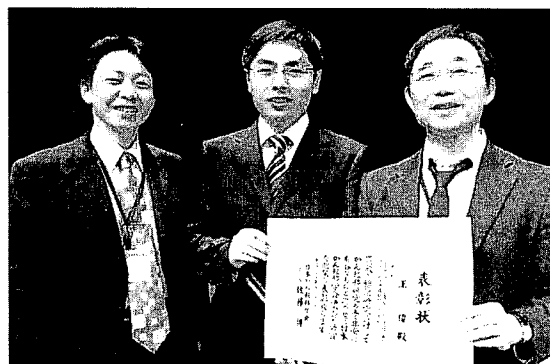
ワークショップ、ポスターセッションは意識的に若手の先生方に座長をお願いしましたが、的確な司会ぶりでの議論をリードして頂きました。ワークショップ、ポスターセッションの発表から優秀演題賞を座長の先生方に選出して頂き、選考された優秀演題には賞状と記念品として学会ロゴマークと受賞者の氏名を彫り込んだガラスペーパーウエイトを贈呈いたしました。ランチョンセミナーの弁当とこの記念品は会長のこだわりの品でしたが、両者とも大好評で、我ながら苦勞が報われた思いが致しました。2日分の弁当に金沢らしさ・名産を詰め込むために、4回の試食を繰り返しましたが、参加者にはこちらの意図が十分に伝わったようでうれしく思いました。

今年度の名誉ある日本がん転移学会研究奨励賞は浜松医大の山本先生、がん研究所腫瘍内科の王先生に授与され、記念講演が行われました。

本学会は、来年度は浜松で開催されますが、本学の教員・大学院生が今年以上に本学会で活躍されることを期待しています。



日本がん転移学会理事と国際MRSのメンバー



奨励賞：研究奨励賞を受賞した王博士(中央)、矢野教授(左)、筆者(右)